

道徳の時間（中学校） 偉人の生き方に学ぶ ～中江藤樹「孝」の心を中心に～

本 田 実

1. はじめに

平成 27 年 3 月 27 日、文部科学省は「特別な教科」として格上げする小中学校の道徳について、新たな学習指導要領を告示した。教科書に基づく授業が行われる時期は小学校は平成 30 年度、中学校は翌 31 年度からとしている。また、今年 4 月以降、各校の判断で新指導要領の内容を反映した授業が可能になる。新指導要領では評価の仕方を記述式とし、専門家会議で詳細な方法を決めるとも告示した。今回、誌上に掲載するものは平成 26 年 6 月に実施した授業であり、平成 20 年 9 月の「文部科学省・中学校学習指導要領解説 道徳編」に則ったものである。

平成 25 年、中学 1 年生・2 年生を対象に行った授業を『偉人の生き方に学ぶ～西郷隆盛の生き方を巡って、人生のモデルを見つける試み～』としてまとめた。偉人を教材とする理由として、偉人の生き方を通して子どもたちが懂れるものを持つ。それが将来に向けて力強く生きる原動力になるということが一つ。今一つはその生き方の中には必ず人としての正しい歩みがある。偉人としての歴史的業績の大きさはいうまでもないが、「挫折」や「短所」に焦点を当て、そこを起点とした「人間力」に注目した授業を計画・実施することで、生徒に人間としての生き方をより深く見つめさせることが理由であり、目的である。

前回の西郷隆盛の授業での反省点は多々あったが、今回は「人間の精神的成長」を特に考慮し、ちょうど思春期に入る時期に意味のあるテーマと人を選ぶこととした。そこで「中学校学習指導要領解説」の「道徳の内容」『2 主として他の人とのかかわりに関すること (2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。』『4 主として集団や社会とのかかわりに関すること (6) 父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。』に該当する点から人物を選択した。

『論語』學而第一・第二章句に「孝弟にして上を犯す者は鮮し。・・・孝弟なる者は其れ仁を為すの本か」とある。孔子は孝は仁の本であると説く。ここには「道徳の内容」2 の (2)、4 の (6) が含まれている。『温かい人間愛の精神』『父母、祖父母に敬愛の念を深め』るものの本となるものは「孝」である。その点から今回は中江藤樹を選択した。

2. 道徳の教材・資料

明治5年「学制」の実施以降、道徳教育は幾多の変遷を経てきた。明治だけでも百家争鳴。教育勅語により沈静化したが、その後の大正デモクラシーの影響、戦前・戦中の国民道徳、そして戦後の道徳空白時代。道徳空白時代は別として、教材はそれぞれの時代を背景として選択され、国民に求める道徳観自体も変化した。戦後の道徳空白時代は、国内の状態を反映し青少年の非行や犯罪が増加した上に内容も悪化していった。そのような状況から学校での道徳教育の復活を求める声が上がりはじめた。

そして昭和33年「道徳の時間」が特設され現在に至っている。

これはいわずもがなの「修身科」以降のおおまかな流れである。

平成27年3月の道徳の教科化決定を前に、2月以降新聞紙上、その他で道徳の教科化実施についての報道が相次いだ。

(ア) 副教材としての「心のノート」と「読み物資料」

文部科学省が今回作成した副教材「私たちの道徳」では、「いじめの対応」「日本の伝統と文化の尊重」「情報モラル」の3点に特に力を入れたとしている。「情報モラル」は携帯電話やインターネットなどの急速な普及に対する必要性から、初めて取り入れられた。

(「情報科」では法的な面からの教育を行なっている。)
「いじめの対応」「日本の伝統と文化の尊重」については、これまでの教材でも取り上げられてきている。しかし近年の情勢を考慮し、一層配慮したものにすることが重要としたのであろう。

平成14年度から副教材として「心のノート」の配布が始まった。平成20年7月23日に行われた「心のノート」の改善に関する協力者会議(第1回)の議事録によると、教師の使用状況としては、小学校97.1パーセント、中学校90.4パーセントという報告がなされている。数字としては決して低いとは言えない。ところが、学校現場からは「授業で使いにくい」という声はかなりあがっていたのである。理由として「抽象的なメッセージや短文」「自分の気持ちを記入する欄が中心」だったことなどがあげられている。実際内容を一見すると、一般に市販されている「心を癒す書物」的であり、挿絵は漫画がある程度の量を占めるなど、およそ道徳の副教材としてはどうかと感じたのが、第一印象である。児童・生徒が親しみやすい工夫という声が聞こえてきそうだが、子どもへの迎合以外のなものでもない。そこには大人として子どもを育てるといふ毅然とした姿勢は残念ながら感じられなかった。

平成24年の文部科学省による「読み物資料集」の中に採られた歴史上の人物は、小学校では「岩崎弥太郎、小川笙船、山川健次郎」など。また中学校では「緒方洪庵、石井筆子、加納治五郎」などを扱っている。新教材では小学校の人物がすべて入れ替わる。さらに歴史上の人物はほとんど小学校で扱う。「二宮金次郎、葛飾北斎、石川啄木、小泉八雲、野口英世、坂本龍馬」などである。海外の人物として「リンカーン、フェアブル、マザー・テ

レサ」らが名を連ねる。中学校では「松下幸之助、本田宗一郎、緒方洪庵、ガンジー、アンネ・フランク」らの名が見られる。松下幸之助、本田宗一郎は歴史上の人物として採ったか、著名人として採ったかは微妙なところである。

また、現役である澤穂希、内村航平、山中伸弥氏等各氏については違和感を覚える。生徒たちは二宮金次郎や緒方洪庵より身近に感じるかもしれない。しかもどういう点が評価されているのかも分かりやすい。しかしそれだけの問題だろうか。敢えて極論を言うならば、失礼ながら各氏の今後の人生は分からない。そういう意味からも近視眼的な人物の選択をするべきではないと考える。

（イ）民間各社の道徳教材

現在道徳の教科書はなく、多数の出版会社から道徳教育の副読本が出版されている。平成27年度の中学生の1年生から3年生までの内容は文部科学省の「私たちの道徳」と関連できるものになっている。「学研」の道徳副読本は「中学道徳 かけがえのないきみだから」、「みんなのどうとく」「東京書籍」は「中学道徳 あすをひらく」などという名前で出版されている。内容は「中学道徳 かけがえのないきみだから」（平成27年度版）には松井秀喜、イチロー、高倉健、長谷部誠、森繁久彌など著名人の資料が並ぶ。さらに教材に対して次のような紹介文がある。『有名だけではなく、感動ストーリーなどの実話が、中学生の心にダイレクトに訴えかけます』。この点についても考え方はさまざまあると思う。

さらに各社の中学生向けで人物を扱ったものをいくつか挙げる。

豊田佐吉の決心 《現実をよく見極め、自らを振り返り、個性を伸ばして自己を向上させようとする意欲を育てる。》（日本文教（大阪書籍））

樋口一葉 人生を切り拓く 《理想の実現を目指して、自分の人生を切り拓くために努力する態度を育てる。》（正進社）

国宝「松林図屏風」長谷川等伯 日本の文化を見詰める 《個性豊かな日本の文化について理解を深め、その継承と新しい文化の創造に寄与しようとする心情を養う。》（光村図書）

六千人の命のビザ 人類の幸福 《杉原千畝の生き方に学び、国際的視野に立って世界の平和と人類の幸福に貢献しようとする意欲を育てる。》（教育出版）

孔子の言葉 《自主的に考えるとともに自分の言動を振り返り、責任をもって誠実に生きようとする態度を養う。》（日本文教（大阪書籍））

ノーベル 人生を切り拓く 《苦労を重ねながらも理想を持ち続け、それを実現しようとする態度を育てる。》（正進社）

ともかく、副読本を作る民間の教材会社は一つの資料を探すのに500～600の資料の中から選んでいるという。^{(注)1} 各社の道徳教材は、生徒の作文・詩や作家の創作、新聞各社に掲載されたものなどが採用されており、そういう点から考えればより多種多様な視点から考えさせることができる。ただし、読み物を含め、たくさんの価値の中で、これから生き

ていく日本人としてどこに重点を置いて教えるかは、出版会社によっても違いがあるともいえる。さらに付け加えるならば、出典をみても分かるとおり、もともと道徳的目的を持って書かれたものが少ないということである。当然、道徳的視点から見て価値があると判断されたものが載せられているのであることは理解できる。ただ教材によっては生徒の作品が多く採られているなど、出典の配分の割合やねらいの構成上などから再考を要すると考える。

(ウ) 読み物資料の選択と自作資料の意義

人物を教材とする場合もそれぞれの人物には他の読み物同様テーマがあり、どこに視点を置くかの目安が示されている。例えば、「私たちの道徳」に掲載される松下幸之助は「礼儀」、緒方洪庵は「自他の生命を尊重」にテーマが置かれている。緒方洪庵は現行のものも「道徳の内容の学年段階・学校段階の一覧表」で、(3)-1『生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する』を道徳的論点として考えさせることとしている。しかし、この点については必ずしもその視点から見なければならぬということはないと考える。緒方洪庵を取り上げる場合、(1)-2『より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ』、(2)-2『温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ』に置くなど、学校の状況やクラスに求められるものを鑑み、教師の求めるテーマで行うこともできるのである。

先述した(ア)の中で「現役である」人物については「近視眼的な人物の選択をするべきではない」と述べた。さらに民間会社の副教材の中に取り上げられている人物も、先に挙げた豊田佐吉以下数名(海外の人物は他にも数名ある)にとどまり、「私たちの道徳」とほぼ同等であることを確認した。

扱う内容が「いじめ」であろうと、「社会への奉仕」であろうと、もともと道徳的目的のない、ちょっといい話程度のものでは感動の深さが足りない。確かに「感動ストーリーなどの実話が、中学生の心にダイレクトに訴えかけ」ることはあると思う。しかし、道徳は「訴えかける」ところで止まっては足りないのではないか。生徒の心を揺さぶるような教材が必要なのである。そしてその中心には「徳」が必要である。枝葉末節的な教材ではなく、人間の根本に触れるものがあれば、それを通して「いじめ」の問題や「日本の伝統と文化の尊重」「情報モラル」などの問題に対しての問題意識が必ず芽生え、その解決への道筋を考える糸口になる。その教材として最もふさわしいものは「偉人の生き方」であると考える。

「偉人」の成功・業績ではなく、そこに至るまでの挫折や辛苦の中で何を大切に生きてきたか、それを知り考える中に魂を揺さぶるような感動がある。それが人としての正しい生き方への道筋となり、将来の理想の人間像として心に刻み込まれる。また、その人を通して「徳」の大切さを感じ取ることが、生徒たちの行動の基準となるはずである。これが道徳の根幹であり、新作の教材にはないものである。人生の中には矛盾がある。生の人間

の生きざまから感動だけではなく、疑問を抱くことがあってもよいのではないかと考える。「偉人」を扱うには伝記をもとにした自作資料を作ることも一つの方法である。自作であるからこそ、今最も必要な課題意識を持たせることができる。『これだけは知っておきたい道徳授業の基礎・基本』の中で、著者の渡邊弘氏^{(注)2}は、「選択資料の留意点」の第1として「これを学ぼうとしている児童・生徒の生活実態に即して興味・関心をひくものでなければならない」と述べているが、その点に合致する。第2に「児童・生徒の成長発達に即したもの」としている。これは対象が中学生であること、また何学年であるかということ考を考慮した教材のテーマであることを意味する。「1.はじめに」の「人間の精神的成長を特に考慮した」点でこれに合致する。

偉人の伝記について森信三氏^{(注)3}は「一人の偉大な魂が、いかにして自己を磨きあげ、鍛えていったかというその足跡を、もっとも具体的に述べたものですから、抽象的な理論の書物と違って誰にも分かるし、また何人にもその心の養分となるわけです。(中略)われらがいかに生くべきかという問題に対して、端的明白にその道を示してくれるのは、何と言っても伝記以外にないからです。」と述べている。さらに伝記を読むのに適当な時期として、立志の時期である「十二、三歳から十七、八歳」としている。この点については、九州大学医学部名誉教授の井口潔氏^{(注)4}の提唱する『生物学的視点からの教育の見直し』の中で、「ヒト」が「人間」となる成長過程の第3期、「青年期（11歳～20歳）」は「人間の生き方を教えるような書物に親しみ、いかに生きるべきかを考えます。理想を素描する時期が訪れて、生を受けた意味、使命感を感じて、生き方を選択して、志を立てます」と述べている点と符合する。哲学的にも生物学的にも、この時期に伝記に親しむことの整合性を認めることができる。

「偉人」の伝記をもとにした自作資料を作る上で注意すべき点がある。

一つは事実関係が正確で具体的であるかという点である。二つ目はテーマに関わることにこだわり過ぎて内容が偏ることなく、客観的であることである。三つ目は選んだ人物を生徒が知らないこともあり得るため、教師の興味と生徒の興味・関心にズレが生じることである。この点については、今最も必要な課題意識を持つものを選択することで解決できよう。また、教材の人物を知らない場合は、生徒の準備として調べ課題を与えることや、エピソードを補足することで充分に関心を持たせることができる。後に紹介する中江藤樹の授業後の感想文で、そのことは実証された。また、同じ人物であっても、視点のあて方によってテーマを変えることもできる。たとえば西郷隆盛を扱う場合でも、「指導者の条件」「言行一致の実行力と優しさ」など、いくつかの方向から考えさせることができる。

自作の資料を作成するには膨大な資料と深い思考を要する。よって毎回自作資料で行なうことには多少無理がかかることは否めない。年間にいくつかを作成し、一つでもストックを増やしていく方がよいだろう。また、再度行う場合に前の反省から修正すべき点も見つかれば、より生徒が内容に関心を持ち、核心に触れやすく、実践にもつながりやすいものに発展させることができると考える。

(エ) 道徳の時間と総合学習の時間の利用

道徳の時間内だけで教材・資料を取り扱うことに、時間の限界を感じる教師も多いのではないだろうか。一つの解決策として考えるのは総合学習の時間の利用であろう。これは決して短絡的な考え方ではない。むしろ積極的な考え方として評価したい。

総合学習の時間と道徳の時間を連結させて行うことで効果を上げることができる。すなわち、調べ課題を総合の時間に調べることで、有効かつ丁寧な準備ができる。準備段階が不十分だと、核心に入るまでに人物の輪郭や背景を捉えることに時間がとられてしまう。前もって人物の輪郭がより明確になるように、生い立ちや時代背景などを調べておくことでテーマに対する理解が早くなる。また、輪郭が見えることでテーマへの関心が生じる利点もある。

注意すべきことは課題を調べる際、インターネットを利用することが考えられるが、適正なものを選択することが大切である。ブログなど個人の思い入れが入ったものは避ける注意を忘れてはならない。

また、1時間1テーマという形式にとられる必要はないと考えている。かつて行なった道徳の授業はすべて複数の時間を使った。短い時間で結論を急ぐことは結果的に授業を行ったという事実が残るだけになる恐れがある。年間予定を組む際に、生徒の精神的成長段階とともに一つのテーマに何時間をかければ、道徳的意識を高め心の能力を伸ばすきっかけにすることができるかを十分に考える必要がある。それは「知」としてではなく「徳」として身につかなければならないからである。「徳」は小さなことでも続けることによって身についた実践する力を持つものことである。実践に結びつくことをまず目標とする、それだけでもじっくりと取り組む必要があることは明白である。

(オ) 道徳授業者としての教師に求められる姿勢

教材の準備が整い、生徒の調べ学習もできあがったからといって道徳の授業が成立するわけではない。ルイ・アラゴン^{(注)5}は「教えるとはともに希望を語ること。学ぶとは誠実(まこと)を胸に刻むこと」、野口芳宏氏^{(注)6}は「学び続ける者のみが、人に教える資格がある」と言う。教師自身が学び続ける、では何を学び続けるのか。これは「教師としての道はいかなるものか」という問いと同じように考えることができる。

自分の教科、哲学、倫理学、社会学、心理学、教育学など何々学に限らず、人間の本質、人生の意義や目的、社会の理想などを学び考え、教師自身の世界観・人生観・道徳観を持ち、道徳的態度を培う努力を失わないことである。

つまり、道徳の教師として身につけるべきことは、

① 指導方法の研究

*教材になり得るものを多く集める。どこに視点を置くか、どこに落とし込み気づかせるか、どのように実践に結びつけるか。これという材料に出会った時に、すでにそのことを考えておかねばならない。

＊道徳の科学的研究と教育実践の一体的積み上げ

言葉と思考だけに終わらず、実践によって新たな発見や正しさを身をもって積み上げていく姿勢を持つことから、指導法につながる。

＊指導技術の探求と改善

上記をさらに進展させ、よりよい指導法へと結びつけていこうとという情熱を持って取り組む。

② 自身の道徳観の確立

＊教師自身の世界観・人生観・道徳観を持ち、教師自身の識見を深めることが根底になければならない。その上に立って初めて、道徳教育の目的が正しく設定され、妥当な内容・ふさわしい教材を選定することができる。

そのために教師自身が幅広く良い本を読むことであり、一道に徹した人の話だけでなく、一般の普通の生活を送っている人の話を聴くなど、さまざまな方向から学び取ろうとする姿勢を持ち続けることである。その中から人としての「素直さ・謙虚さ・公平・公正・寛容・奉仕・尊重」などが培われ、実践する意欲が生まれ、積み重ねられていくのである。

そのようなものが教師自身の中で生まれ、積み重ねられることによって、道徳の時間だけでなく、さまざまな場において、その場で最も必要な徳目が幅や深さを持って大きく働き、ポイントをはずさない対応ができるようになっていくのである。

教育の眼目である「子どもたちの魂に灯をともし、その全人格を導く」ということになれば、我々教師の道が実に果てしないことに思い致されるのである。言うまでもなく、一人の人間の魂を目覚めさせるということは至難中の至難である。

しかし、教師自身が生徒に伝えることができる人間であること、少なくともそのことに努力を重ねる人間であることが求められる。言葉だけの教師を児童・生徒は簡単に見破る。そこからは何の効果も期待できない。教師自身が高い理想を掲げ、人間としての人格・品性を高めていく努力を怠らないことである。

3. 「学習指導案」の作成にあたって

(ア) 学習指導案の視点

教育哲学者、森信三氏は「先哲に学ぶ態度」として次の三つを挙げている。

- ①偉人の考えたこと、為した事柄を、現在の立場から、批判的にみる。
- ②その偉人の生きていた時代を考え、自分もその時代の一人になったつもりで、その偉人の思想や行動を、内側から考える。
- ③もしその偉人が現代に生きていたとしたら、いったいどのような生き方をしようかと考える。

以上の中でも②の態度をもって取り組むことが、偉人と自分を最も結びつけやすく、中江藤樹を通して「孝」を考える上でも適切な視点と考えた。

(イ)「総合学習の時間」ノート・「道徳の時間」テキストの作成

生徒たちは小学校、中学校を通して偉人伝など伝記を読むことが少なく、想像以上に人名を知らない。ましてや業績は、他教科で得た断片的でわずかな知識にとどまることが多い。

前回、西郷隆盛を扱ったあとの「今後の課題」の一つに、資料や書き込みノートをどのような範囲に収めるか、生徒にどこまで求めるかということがあった。具体的には、

- (a) 生徒たちが調べてまとめる部分・余白を用意しておく
- (b) グループごとの調査テーマの発表の場を設定する

ことであった。

その効果として、

- ①人物の生い立ちや業績など、輪郭が見える
- ②各自が調べた部分が、グループ内、グループ同士の発表と合わさって、より立体的な人間像ができあがるのが期待できる
- ③グループ内での協力の上に発表のための協議・発見、さらに友情・尊重・自立などの道徳的資質が助長されることも期待される
- ④各グループの発表によって立体化される段階で、一人の人間像をそれぞれの捉え方で自分と重ねるだろう。そこから「人生のモデル」としてより具体化される

最終的には④が目標である。前回の課題(a)(b)を解決するために「総合学習の時間」ノート・「道徳の時間」テキストを作成した。実際に道徳の時間の授業に入る前に、(a)の「生徒たちが調べてまとめる」時間が必要となる。その時間を総合学習の時間を利用した。今回授業を実施したクラスは中学2年生であるが、木曜日2・3限目に総合学習の時間があり、翌週水曜日4限目に道徳の時間が設定されていた。その間1週間、総合学習の時間内で課題が完成しない場合も、道徳の時間までには十分な時間があった。

ノートとテキストは、「総合学習の時間 偉人の生き方に学ぶ(Ⅰ)～『孝』の人、中江藤樹～」と「道徳の時間 偉人の生き方に学ぶ(Ⅱ)～中江藤樹の伝記(抜粋)～」の2冊を準備した。伝記の抜粋は『近江聖人 中江藤樹が孝養を尽くしたははの姿』(コラム大坪信之)、『ものがたり伝記シリーズ 中江藤樹』(登龍館)をもとにした、中学2年生なら数分で読める内容である。九歳の時に祖父に預けられ、読み書きを習い始めたこと、母との関わり、母への思いに触れた内容が主体となっている。さらに『翁問答』の一節をを加筆して作成した。

この2冊を前もって配布し、(Ⅰ)を総合学習の時間に調べることを課した。調べたり考えたりする内容については、授業の展開の中で後述する。流れとしては時代の情勢、中江藤樹の生い立ち、身分など、背景をおさえた上で、「近江聖人」と讃えられる人物像をとらえる。その根本原理として「孝」があったことへ導く。また、「孝」という文字の意味の理解から自分の親に対する言動を振り返り、自分の姿をはっきりと認識する。親がどんな思いをもって自分と向き合っているのかを受け止める。正すべきところを正す気持ちを持ち、

できるところから実践する気持ちが向かうことに目標を置いて作成した。
以下、総合学習の時間用のノートの内容を記す。

(ウ)「総合学習の時間」ノート

「総合の時間」の課題（図書室で調べてみましょう）	
①	中江藤樹が生きた時代について
②	藤樹の身分はどんな階級ですか。
③	藤樹の生い立ちについて調べてみましょう。 家庭環境（両親・祖父母）について
④	藤樹が『近江聖人』と讃えられる理由として考えられることを4つにまとめてみましょう。
1	陽明学者・思想家として評価されているところ
2	教育者として評価されているところ
3	生活の姿勢に対して評価されているところ
4	母に対する行動で評価されているところ (藤樹と母とのエピソードを調べてみましょう。)
※	9歳ごろ故郷に帰ったことについて
※	25歳ごろ故郷に帰ったことについて
※	28歳ごろ故郷に帰ったことについて

(エ) 学習指導案

星稜中学校 第2学年 A・B組 道徳学習指導案1		
平成26年6月11日(水) 第4校時 2B教室 【指導者 本田 実】		
展開の概要	(2年B組・28名)	
「偉人の生き方から学ぶ ～『孝』の人 中江藤樹」(1)		
授業の目標	中江藤樹は日本陽明学の祖とされ、また多くの徳行によって近江聖人と讃えられる。藤樹の「孝」にまつわる行いを通し、「孝」の行いが人間のすべての本であることを知る。 その精神を学び、自己の現実の生活に生かす意欲を養う。	
本時の目標	①総合の時間に調べたことを通して、当時の時代背景や藤樹の背景を共有する。 ②藤樹の母への情愛を理解した上で、母の思いを中心に考える。 さらに脱藩が「孝」に基づくものであることに気づく布石とする。	
学習活動	配布資料	指導・援助の留意点
1 <導入> 前もって①②③をまとめやすいように、冊子として配布しておく	「総合の時間で調べたこと」(図書室) ①中江藤樹の生きた時代 ②中江藤樹の生い立ちと身分 ③藤樹が近江聖人と讃えられる理由	総合の時間用の冊子は教師が作成する。 * 藤樹の一生・時代背景等をふまえていることを確認。

	(箇条書きにまとめる) ④藤樹と母に関するエピソード	
学習活動	主な発問と活動	指導・援助の留意点
2 <展開> 【発問1】 ①の発表	①中江藤樹の生きた時代 生徒の答えを板書	生徒指名(グループ別)
【発問2・3】 ②の発表 ①について	②中江藤樹の生い立ちと身分 生徒の答えを板書 藤樹の生い立ちをまず、両親 や祖父母などを含めた家庭環 境から見てみる	生徒指名(グループ別) 自分がその時代に生きている一 人になったつもりで、このあと のことを考えてみる
【発問4】 ②について	・家の事情とはいえ、わずか8、 9歳で家族と遠く離れなければ ならなかったことに対する 感想	自己の問題として受け止め、内 省する 生徒指名
【発問5】 ③について	③藤樹が近江聖人と讃えられる 理由 生徒の答えを板書 (箇条書きにまとめる)	1. 孔子の「徳」「孝」、王陽明の 「良知」を学んで自ら実践し、 学び(知)と実践(行)を一 致(合一)させようとした(思 想家・陽明学者) 2. 周囲の人々の徳化、教育に積 極的(教育者) 3. 高位・名声・富裕を求めず、 謙虚、清貧そのものだった(生 活の姿勢) 4. 病気の母の孝行のため職を辞 し、故郷へ帰省した(武士)
	生徒指名(グループ別) 各グループから1つ発表 ↓ 発表が1~4に重なる場合、他の グループから補足を促す	
	*必要に応じて、生徒の答えに補足する	
【発問6・7】 【発問8・9】 ④について	・藤樹が近江聖人と讃えられる 理由の、4「母との関わり」 を中心に考える 9歳ころ故郷に帰ったことにつ いて、この時の母の気持ちを考 える グループ指名	自己の問題として受け止め、内 省する。 グループ指名 代表者の発表
	25歳ころ故郷に帰ったことにつ いて、この時の母の気持ちを考 える。 グループ指名	グループ指名 代表者の発表
	27歳ころ故郷に帰ったことにつ いて、この時の母の気持ちを考 える。 グループ指名	グループ指名 代表者の発表
3 <まとめ>	藤樹の育った環境を知り、将来聖人と呼ばれる基礎がどこにあっ たかの一部に触れた。 また藤樹が近江聖人と讃えられた理由を四つの点から生徒が調べ たことをまとめた。この時間は「学者として」「教育者として」「生 活の姿勢」の三点をまとめた。	

	<p>以上から、藤樹が何を大切に生きてきたかの片りに触れ、「母に対する行動」で評価されている点については、中でも自分に身近な項目であることから、敢えて次時への高まりと広がりを期待させる形で終えた。また配布した資料が藤樹の実践した「孝」を考える足がかりになることを期待した。 この時間の感想をまとめて翌日提出する。</p>
<p>【評価の観点】 偉人として評価されるところへ至るまでの生い立ちや苦勞、辛苦を知ること、自分の環境に引き寄せ、「生き方」を考えるきっかけになったか。</p>	

4. 授業の展開と考察【第1時】

道徳の時間の前週、総合学習の時間を利用して準備をするとともに、「中江藤樹の伝記（抜粋）」も読んでくるように指示してある。それほど詳細なものではなく、「総合学習の時間」ノートに沿って生徒が調べることで、授業の核心に当たる部分に近づく内容にした。

（ア）導入

学習活動（教師）	学習活動（生徒）
①中江藤樹の伝記を読んできましたか。 （準備の確認は必要）	（全員挙手）
②以前から中江藤樹の名前を知っていた人。	（皆無に近い）

上記については予想どおりであった。（イ）「総合学習の時間」ノートの作成でも述べたように、自国の偉人の名前を知らないことを確認する結果になった。高校生や大学生でも偉人に限らず日本文学の作家の名前もあまり知らない。ある短大生を対象に調査した時、夏目漱石の「吾輩は猫である」を読んだことがないという学生が約90%であったことも驚きであったが、伝記を含めて本を読まないことに大きな原因があると考えられる。歴史の時間に人名と業績をセットで暗記することとは次元が違うのである。

（イ）展開

<p>中江藤樹という人がどういう人か、その輪郭を捉えよう。 総合の時間を利用して、それぞれグループや個人で調べたことをもとにして、明らかにしていきたい。</p>	（前もって配布してある冊子を開く）
<p>【発問1】 藤樹の生きた時代は、何時代か。 生徒の答えを板書</p>	生徒指名＝グループの代表 江戸時代

【補足】

江戸時代であるが、もう少し厳密に言うと江戸時代のはじめごろに生きた人である。江戸幕府の創立は1603年、藤樹が生まれたのは1608年であることも補足した。

戦乱が治まり、新しい時代とともに生きた人であることをまず確認した。

<p>【発問2】 藤樹の身分はどんな階級か。 生徒の答えを板書</p>	<p>生徒指名＝グループの代表者 武士階級</p>
---	--

【補足】

武士階級

藤樹が引き取られた祖父は150石取りの武士、今でいえば課長か課長補佐くらいの身分だった。

江戸時代といえば封建制の時代で、士農工商の四つの身分にはっきりと分けられていた時代だったこと。武士はその頂点に立つ身分だったことを生徒に確認した。藤樹が武士階級であったことは、あとの「孝」の部分でつながるのでおさえておいた。

<p>【発問3】 藤樹の生い立ちをまず、両親や祖母などを含めた家庭環境から見てみましょう。</p>	<p>生徒指名＝グループの代表者</p>
<p>生徒の答えを板書</p>	<p>近江の国の人 父親は藤樹が幼いころに亡くなった。 八歳の時、祖父の養子として米子藩へ行った。 九歳の時には藩主の国替えで大洲藩へ行くことになった。 そのため母は近江の国、小川村で独り暮らしをすることになった。</p>

近江の国は今の滋賀県、米子藩は鳥取県、大洲藩は愛媛県であることを確認した。その上で生徒が調べてきた内容を補足してまとめた。

父親は藤樹が幼いころに亡くなった。

9歳の時に伯耆米子藩主加藤家の150石取りの武士である祖父・徳左衛門吉長の養子となり米子に赴いた。これは藤樹の母が藤樹の将来を考えてのことだった。

翌年、米子藩主加藤貞泰が伊予大洲藩（愛媛県）に国替えとなり祖父母とともに移住する。

13歳の時、優しく世話をしてくれた祖母が63歳で亡くなり、14歳の時、祖父が75歳で亡くなって、家督100石を相続した。母は故郷、近江の國小川村で一人で暮らしていた。

<p>【発問4】 自分がその時代に生きている藤樹になったつもりで受け止めてみよう。みんなは中江藤樹ですよ。 家の事情とはいえ、わずか8歳か9歳で家族と遠く離れなければいけなくなりました。どんな気持ちになるでしょう。</p>	<p>自分がその時代に生きている一人です。 藤樹の立場で自己の問題として受け止め、考える。 （グループ内で話し合い） 生徒指名＝グループの代表者</p>
---	---

生徒指名（挙手を促す）＝2～3名

生徒A：9歳というと小学校の4年生です。小学校の4年生で本当の親と離れるのはと

でも悲しくて、とてもさみしくて、とても辛かったと思いました。（男子）

生徒 B：8、9 歳の時から親と離れ、学問に取り組んでいたのは大変だったと思います。
（女子）

生徒 C：母と離れるのを我慢できるのがすごいなと思いました。私だったら離れるのがいやなので我慢できないと思います。藤樹は気が強い人だと感じました。（女子）

考察

生徒 A は発問に対して的確な答えをしている。B はやや藤樹の気持ちに触れているが、C と同様感想とも言える。しかし、「藤樹の立場で自己の問題として受け止め」たと言えるだろう。祖父は身内とはいえ、幼くして実母から遠く離れ生活することは生徒 A の答えが少年藤樹の気持ちであったらうことは想像できる。

3 人の答えは他の生徒の気持ちを代弁していると考えてよいだろう。この答えを受けて【発問 4】を次のようにまとめた。

*人間の一生はすべてよいことばかりではありません。

*挫折や不遇な時代は必ずある。人間がどんな一生を送るかは「その時代をどう過ごすか」が大きく関わるのです。

藤樹の生い立ちを大まかに捉えた上で、「総合学習の時間」用ノート④で調べた内容により、藤樹の人間像をさらに明らかにする。その内容は藤樹が「近江聖人」と讃えられる理由を調べるものである。ただし、4 つの方向から立体的になるように構成した。それは以下のようなものである。

- (1) 陽明学者・思想家として評価されているところ
- (2) 教育者として評価されているところ
- (3) 生活の姿勢に対して評価されているところ
- (4) 「母に対する行動」で評価されているところ

<p>【発問 5】 藤樹が「近江聖人」と讃えられる理由は、どういうところにあるのでしょうか。 みんなが総合の時間で調べられた範囲で、挙げてもらいます。 生徒の答えを板書</p>	<p>(冊子④) 生徒指名＝グループの代表者</p>
---	--------------------------------

「総合学習の時間」用ノートにまとめられた内容を、各グループの代表者が発表した。

- (1) 陽明学者・思想家として評価されているところ

17 歳、独学で「論語」などを読み、中国の朱子学におおいに心を惹かれた。

33 歳の時、「王龍溪語録」を、37 歳の時「王陽明全書」を読み、王陽明「致良知」説を信じ尊ぶようになった。それらから学んだ孔子の思想「徳」「孝」、王陽明「良知」を自ら

実践し弟子に教えた。また学び（知）と実践（行）を一致（合一）させようとした。

(2) 教育者として評価されているところ

故郷の小川村の居宅を私塾として開き、およそ14年間、藩士や近郷の人々に身分の分け隔てなく、「孔子」「孟子」の学、「良知」の学などを教えた。良知とは人が生まれながらにもっている、正しいことと正しくないこと・善いことと悪いことを誤らない正しい知恵のこと。

藤樹は学問研究だけに専念したのではなく、村人と苦楽を共にして生きた学者だった。藤樹が逝去した時、近郷の人たちはあたかも父母を失ったかのような深い悲しみに包まれたという。それほど温かい心をもって周囲の人への徳化、教育に熱心だった。

(3) 生活の姿勢に対して評価されているところ

生活は貧しかったが高い地位や名声、富を求めず、謙虚、清らかな生活をした。自ら学んだことを、単なる知識とするのではなく、実践し言うことと行なうことが一致すること（知行合一）を求める生活態度だったこと。

(1) から (3) までの項目で生徒が調べたことを文章化すると、以上のようなものである。

その中で藤樹が「聖人」と讃えられた最も大きな理由はどういうところなのかを、【発問6】のような尋ね方をした。

<p>【発問6】学者としてあるいは教育者として、そして普段の生活の姿勢について確認しました。確かにそういう点では立派な人だったと言えると思います。</p> <p>そこで去年、西郷隆盛を学んだ人は覚えていると思いますが、その人の行なった仕事が立派なだけでは、それほど評価されることはありません。</p> <p>たとえば、野球がすごくうまい、サッカーがすごくうまい、勉強がとてもしっかりできる、それは今の話にあてはめると仕事の部分です。</p> <p>それだけでは、人は「野球やサッカーがうまい、勉強ができる」というだけの評価で終わりますね。そこに何か加わらないと、人は「立派な人だ」「すばらしい人だ」という評価をしないのです。その「何か」とは何だと思いますか。</p> <p style="text-align: center;">生徒の答えを板書</p>	<p>生徒A 言うことと行動が違わないこと</p> <p>生徒B 人のことを考えられる思いやりの心</p> <p>生徒C 自分がうまくても自慢しないこと</p>
---	--

考察

生徒が指摘した中で最も多かったのは一部 (2) を含んでいたが、(3) の『自分の学んだことを実践し、言うことと行なうことが一致すること（知行合一）を求める生活態度』か

ら考えたものだった。特に前年、西郷隆盛の生き方を学んだ生徒はこの部分を指摘していた。

生徒Aの考えは「学び（知）と実践（行）を一致（合一）させようとした」「実践し言うことと行なうことが一致すること（知行合一）を求める生活態度だった」という点をふまえたものである。また生徒BとCは「村人と苦楽を共にして生きた学者だった。藤樹が逝去した時、近郷の人たちはあたかも父母を失ったかのような深い悲しみに包まれたという。それほど温かい心をもって周囲の人への徳化、教育に熱心だった」さらにBは「生活は貧しかったが高い地位や名声、富を求めず、謙虚、清らかな生活をした」という点をもとにしていた。

一般的な価値観からではなく、自分たちが調べ発表した内容をふまえて考えている。『道徳教育研究』^{(注)7}の中で水野哲弥氏^{(注)8}は授業作りの要点の一つとして『資料の関係性を踏まえてねらいに迫ろうとする意識』『「この時の気持ちは」と問う授業展開があるが、そこから生まれる子どもの発言は浅く、ともすれば、はじめからわかっていることを確認するだけの授業になりやすい』と指摘されている。この指摘は道徳が道徳であるための重要な点を述べられていると考える。

【発問 4・5・6】は水野氏が指摘されている「資料の関係性」や「この気持ちは」に当たるものである。最初に森信三氏の「先哲に学ぶ態度」で、『自分もその時代の一人になったつもりで、その偉人の思想や行動を、内側から考える』をあげたのは、生徒が考える姿勢がわかりきった答えにならないことを意識したものである。

【発問 6】について以下のようにまとめた。

そうですね。人柄とか人としての品格、人格の高さですね。
自分の能力の高さを鼻にかけたりしない、謙虚さとかのある人。あるいは思いやりのある人。藤樹は自分の学びの中から、そのようなことを得た人だったのですね。

母に対する行動で評価されているところ （藤樹と母とのエピソードを調べてみましょう。） ※ 9 歳ころ故郷に帰ったことについて ※ 25 歳ころ故郷に帰ったことについて ※ 27 歳ころ故郷に帰ったことについて <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">生徒の答えを板書</div>	「総合学習の時間」ノート P3
---	-----------------

※ 9 歳ころ故郷に帰ったことについて

母がアカギレやしもやけで辛い思いをしていることを知り、居ても立ってもいられなくなった藤樹は、アカギレやしもやけによく効くという薬を買い求めて、雪の中を実家へ帰った。

ちょうど母は井戸の水を汲んでいる最中だった。泣きながら走り寄る藤樹を、母は止め、「男子は一度目標をもって家を出たら、めったなことでは戻ってはいけません。おじいさんの家に帰りなさい」と諭したのである。

<p>【発問7】9歳ころ故郷に帰ったことについて、この時の母の気持ちを考えてみましょう。 生徒の答えを板書</p>	<p>「総合学習の時間」ノート P3《自分の問題として、自分を藤樹に置き換えてみましょう》 グループで話し合い 代表者が発表 (2グループ)</p>
--	--

2グループから4つの考えが出た。以下に紹介する。(以下の発問も同様)

生徒 D: 母の気持ちとして、藤樹が薬を持って来てくれたことに抱きしめたい気持ちだったと思います。本当はずっといてほしかったと思います。でも、藤樹に立派な男になってほしかったから、辛い思いをしておじいさんの所へ帰るように言ったのだと思いました。母は本当にすばらしい人だと思いますし、僕も我慢を大事にしたいと思いました。

生徒 E: 母も辛かったと思うけれど、そこで甘やかさない母は立派な人だなどと思いました。そこで甘やかしては祖父に預けた意味がないと考えたのだと思います。母はそういう覚悟のある行動をしたと思います。

生徒 F: 藤樹は母と離れて暮らしていて悲しいはずなのに、立派な人間になってほしいから、わざと冷たく突き放して帰らせた気持ちを考えました。母の気持ちに同感できる部分とできない部分がありました。

同感できる部分は、藤樹が立派な人間になってほしいという気持ちです。

同感できない部分は、走り寄る藤樹を止めたことです。私がまだ子供だから分からないだけで、大人になって母親になったら分かるようになるのかなと思いました。

生徒 G: 藤樹は母の行動の影響をつよく受けていると思いました。こちらに歩み寄る息子を制止し、冷たい言葉を吐き出す姿は、母というより男らしさを感じました。息子を思いやる姿がとてもしっかりいいと思いました。

考察

グループの誰と指名したのではなく、グループで発表する生徒を決めさせたので、発表した生徒は他生徒の考えを含めて自分の考えを述べたと思われる。

生徒 D の「抱きしめたい気持ちだったと思う」という表現から、『自分の問題として』捉えていることを感じた。、自分の母親ならこういう気持ちだろうと考えたのではないだろうか。

他のグループ、生徒も表現は違うが、母も辛い気持ちだったことは同様に捉えている。そこに藤樹が立派な人間になってほしいという願いがあることもつけ加えている。生徒 F は女子であるが、母の行為すべてを肯定していない。母の藤樹に立派な人間になってほしいという願いは理解できる。しかし、冷たく突き放すことはないのではないのか。彼女の気持ちは藤樹の行為や気持ちを受け止めた上で、論ずという方法もあったのではないかと

いうところにある。これは我々教師が生徒に向き合う姿勢にも通じるし、親としても通じる点を出ている。自分がまだ子供だから分からないのであって、母親になったら分かるようになるのだろうかという感想は知的な理解から自身の心情につながっている。すなわち、理と情が伴った受け止め方をしているのである。

生徒 G の考えは、亡くなった父の役割を果たす母を感じ取っており、さらにそういう強い母に憧れをいだいていることが感じられた。

道徳の授業での「気持ちを考えてみましょう」の問いは、こういう点に至ることに配慮しなければ、「わかりきったこと」を上塗りするだけになってしまうのである。そういう点から藤樹の気持ちについては、補助として必要を感じた時に尋ねることにした。

※25 歳ころ故郷に帰ったことについて

一人暮らしを続けている母を、自分が仕えている大洲の国に迎えるために帰郷した。しかし、母は一緒に行くことを拒んだのである。

【補足】

大洲の国に仕えていた藤樹は、この時郡奉行といって農村の行政を行なう立場になっていました。学問に励んだ結果、大事な仕事を任されるようになっていたのです。

<p>【発問 8】 25 歳ころ故郷に帰ったことについて、この時の母の気持ちを考えてみましょう。</p> <p style="text-align: center;">生徒の答えを板書</p>	<p>《自分の問題として、自分を藤樹に置き換えてみましょう》</p> <p style="text-align: center;">グループで話し合い 代表者が発表（2 グループ）</p>
---	--

生徒 H：藤樹は母を守れるほど強い男になったと自分は思います。一人前の男だし、母のことをそこまで思っているのに、なぜ拒否したのだろうと初めは思いました。そこで考えたのは母は藤樹を本当の男にするために、自分が甘えることをしなかったのだということです。藤樹の母は本当にすごいと思いました。

生徒 I：お母さんは藤樹が大洲で一緒に暮らせるように迎えに来てくれたことを、本当はとてもうれしいのに、藤樹の学問や仕事の邪魔にならないように同行することを拒んだのだと思います。

すてきなカッコいいお母さんだと思いました。私も母親になる時がきたら、その思いを忘れないことが大事だと思いました。

生徒 J：母は一人暮らしで大変だったと思います。でも息子に負担をかけたくないと思って大洲へいくことを拒んだのだと思いました。それはとても強い心だと思えます。そして息子に学問をもっと学んでほしいという思いが強かったのだと思えました。

考察

前の問いがこの答えをスムーズにしている。学問にいつそう励んでほしいという母の思いは、前問の流れから捉えやすかったようだ。

その中で藤樹が郡奉行に出世したことをふまえて、「一人前の男になった」ことを母もある程度認めているように捉えている。注目したいのは「出世してほしい」という言葉を使わず、「学問」「仕事」に励むという表現である。この共通点は、「いい学校に進んで、大きな会社に就職して、そこそこ出世して」という、世の一般的な思考ではなく、今回の教材の「何に注目して読むのか」が明確になっているのではないかと考える。「学問」を学ぶ目的は、旬子の「夫れ学は通の為にあらざるなり、窮して苦しまず、憂えてこころ衰えざるが為なり。禍福終始を知って惑わざるが為なり。」にあることにいずれはたどり着いてほしいものである。

※27 歳ころ故郷に帰ったことについて

母への孝養を理由に故郷へ帰ることを願い出たが、何度願いを出しても認めてもらえなかった。そこで脱藩してまで、すべての財産と地位を捨てて故郷に帰り、「無一物」の人間になって、思いやりと真心をもって母に仕えた。

<p>【発問 9】 27 歳ころ故郷に帰ったことについてこの時の母の気持ちを考えてみましょう。</p>	<p>《自分の問題として、自分を藤樹に置き換えてみましょう》 グループで話し合い 自分たちの考えをノートにまとめる</p>
--	---

「27 歳ころ故郷に帰ったことについて」の感想は、ここまでの展開で予想されたとおり、「うれしさ」と同時に「すべてを捨ててきた驚き」などに集約される。この時間の目標を達成するために展開した、「母」の立場からの気持ちを再度まとめる意味でノートにまとめさせた。

この時間をもとに次の時間では藤樹を中心に置き「孝」の心へ迫る展開に入る。
 以上のことを含めてこの時間のまとめに入った。

(ウ) まとめ

藤樹の母への思いはそれぞれの行為から充分伝わってきたと思います。藤樹の育った環境を知り、将来聖人と呼ばれる基礎がどこにあったかを知ることができました。さらに、藤樹が何を大切に生きてきたかが、母の気持ちを考える中から感じ取れたと思います。次の時間は、今日みんなが発表したエピソードを手掛かりに、もう一步藤樹が大切にしたものを深めたいと思います。中江藤樹の伝記（抜粋）をもう一度読んでおいてください。

それでは、今日の時間を終わります。

【評価の観点】

藤樹の育った環境、将来聖人と呼ばれる基礎がどこにあったかを理解できたか。
さらに、藤樹が何を大切に生きてきたかなど、偉人として評価されるどころへ至るまでの生い立ちや苦勞、辛苦を知ること、自分の環境に引き寄せ、「生き方」を考えるきっかけになったか。

【板書】

(不遇な藤樹の生い立ち)	
<p>① 学者として</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 独学で論語などを学び、 ・ 学び（知）と実践（行）を一致させようとした <p>② 教育者として</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 藩士や近郷の人々に身分の分け隔てなく学問を教えた ・ 温かい心で熱心に教育した <p>③ 生活の姿勢</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 貧しかったが、地位・富・名声を求めず、謙虚で清らかな生活 ・ 学び（知）と実践（行）の一致を求めめる生活態度 	<p>「孝」の人 中江藤樹</p> <p>江戸時代初め頃の人</p> <p>武士 近江（滋賀県）の人</p> <p>八歳 祖父の養子として</p> <p>米子藩（鳥取県）へ</p> <p>九歳 藩主の国替えで</p> <p>大洲藩（愛媛県）へ</p> <p>母は近江の国、小川村で独り暮らし</p> <p>八、九歳で母と遠く離れて暮らすことになった藤樹の気持ち</p> <p>⇐</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ とても悲しい、さみしい、辛かった ・ 8、9歳の時から親と離れ、学問に取り組んでいたのは大変だった ・ 私だったら我慢できない <p>藤樹は気が強い人だ</p> <p>↓ 後に「近江聖人」と讃えられた理由</p>
	<p>④ 藤樹と母に関するエピソード</p> <p>九歳の冬</p> <p>（母の気持ち）</p> <p>うれしいが、藤樹の成長を願う気持ち</p> <p>二十五歳の春</p> <p>（母の気持ち）</p> <p>藤樹の仕事や学問の邪魔になる</p> <p>↓ 自分が負担になる</p> <p>二十七歳</p> <p>（母の気持ち）</p> <p>うれしいが、</p> <p>すべての財産と地位を捨ててきたことへの驚き</p> <p>藤樹の成長のためにしてきたことからの残念な気持ちもあったのではないか</p>

5. 「学習指導案」の作成にあたって②

(ア) 「学習指導案」の視点

第2時は藤樹と母との関わりを通じて、「孝」について考えることが中心になる。前時は藤樹の不遇な生い立ちを知り、母や藤樹がどのような気持ちであったかを察した。そういう境遇から後に近江聖人と讃えられた理由の四つをまとめた。そのことが「孝」によって、この時間につながりを持つ。近江聖人と讃えられた四つ目の理由を中心に展開した。

(イ) 学習指導案

星稜中学校 第2学年 A・B組 道徳学習指導案 1		
平成26年6月17日(水) 第4校時 2B教室 【指導者 本田 実】		
展開の概要	(2年B組・28名)	
「偉人の生き方から学ぶ ～『孝』の人 中江藤樹」(2)		
授業の目標	中江藤樹は日本陽明学の祖とされ、また多くの徳行によって近江聖人と讃えられる。藤樹の「孝」にまつわる行いを通し、「孝」の行いが人間のすべての本であることを知る。 その精神を学び、自己の現実の生活に生かす意欲を養う。	
本時の目標	藤樹の「孝」は母の厳しくも深い愛情からだけに止まらず、胎内に宿っている時からの恩に遡っていることを知る。そこから藤樹の「人間愛」につながることを理解する。 その精神を学び、自己の現実の生活に生かす意欲を養う。	
学習活動	配布資料	指導・援助の留意点
1 <導入>	前時	
	* 藤樹の育った環境を知り、将来聖人と呼ばれる基礎がどこにあったかを知った。 さらに、母の気持ちを考えたところから、藤樹が何を大切に生きてきたかも感じられただろう。	
2 <展開>	主な発問と活動	指導・援助の留意点
【発問1】	・ 藤樹は武士階級であった。 上司の許可がもらえないまま、国を出てしまったことに問題はなかっただろうか。 (武士階級での規則) 生徒指名	
【発問2】	・ 脱藩は処罰を受けることを知らなかったのか	
【発問3】	・ 脱藩は重い罪になる。 処罰を受けることが分かっているながら、藤樹はどうして脱藩したのだろうか。	自己の問題として受け止め、内省する。 ④を中心に「孝」について考える。

	<p>自分の考えをもとに グループで話し合う グループ指名</p>	<p>一生の生活が保障されている武士の地位を捨てることは、いかに親への孝行を尽くす心があったとはいえ、よほど決意がなければできない、という点への気づき。</p> <p>グループ指名 代表者の発表</p>
	<p>板書</p>	<p>人間は</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安易な道を選びやすい ・権威への盲従 ・自己の信念を曲げてでも出世を求める <p>などに流れやすいことへの気づき。</p> <p>答えを考えついた生徒を指名する</p> <p>生徒指名</p>
【発問 4】	板書した内容から見られる人間の傾向の傾向	生徒指名
【発問 5】	<p>藤樹の母への感謝は、どこから始まっているのだろうか。</p> <p>生徒の答えを板書</p>	<p>資料「翁問答」「手紙」をもとに</p> <p>グループで話し合い 代表者が発表（2グループ）</p>
【発問 6】	親に「孝行」というのが、具体的に「自分はどうするか」、「何ができるか」を明らかにしてみよう。	生徒指名
【発問 7】	親の面倒をみている犬を見たことがあるか。そんな馬を見たことがあるか。	生徒指名
【発問 8】	アフリカでシマウマが走れなくなるとどうなるか。	生徒指名
【発問 9】	そのライオンが、年を取って牙がなくなるとどうなると思うか。	生徒指名
【発問 10】	人間は年をとっても生きていきます。なぜか。	生徒指名
【発問 11】	25歳の時は母と一緒に暮らそうという気持ち。27歳の藤樹は全てを擲って何一つ持たずに帰ってきた。形はない、目には見えないけれどある。それは何だったのか。	生徒指名
<p>【評価の観点】 生徒たちが調べたことや考えてきたこと、偉人として評価されるどころへ至るまでの生い立ちや挫折を知ること、資料を反芻し、人間の「生き方」を考えるきっかけになったか。 資料の文や言葉にとらわれず、自己の問題として受け止めることができたか。 藤樹が聖人と言われる種子が、その行動の中にあっただことに気づけたか。</p>		

6. 授業の展開と考察【第2時】

前週の道徳の時間に「中江藤樹の伝記(抜粋)」も読んでくるように指示した。本時は『藤樹の「孝」は母の厳しくも深い愛情からだけに止まらず、胎内に宿っている時からの恩に遡っていることを知る。そこから藤樹の「人間愛」につながることを理解する。』を目標とした。

(ア) 導入

学習活動(教師)	学習活動(生徒)
③中江藤樹の伝記を読んできましたか。	(全員挙手)
(準備の確認は必要)	

前時は藤樹と母とのエピソードをもとに、藤樹の行動に対する母の心情を読み取ることを中心にしてきた。藤樹が27歳の時、すべてを擲って故郷に帰って来た時の母の気持ちを考えるところまで進んだが、この時の藤樹の心情を自分に引き寄せて考えることから始めた。

(イ) 展開

<p>【発問1】『27歳ころ故郷に帰ったことについて』ここまでは母の気持ちを考えてきました。ここでは藤樹の気持ちを考えてみたいと思います。</p> <p>藤樹は武士階級でしたね。</p> <p>上司の許可をもらえないまま、藩を出てしまいました。このことに何か問題はなかったのでしょうか。つまり、無許可で藩を出たことに規則の上で問題はなかったかということです。</p> <p>みなさんはどうだったと思いますか。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">生徒を指名</div>
---	--

生徒K：許可がなければ出られなかったのだから、何か罰があったと思います。

【補足】「脱藩」という言葉が出てきましたね。

「脱出」「脱獄」という言葉があるように単に国を出ることとは違うという想像はつきますね。

脱藩は家来の身分で主人に反するものとみなされ、追手が放たれることもありました。家は断絶、本人が捕えられた場合、死刑になることもありました。

<p>【発問2】処罰を受けることを知らなかったと思いますか。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">生徒を指名</div>
---	--

生徒L：知っていたと思います。

<p>【発問3】 処罰を受けることを分かっていながら、藤樹はどうして脱藩したのでしょうか。</p> <p>生徒の答えを板書</p>	<p>《自分の問題として、自分を藤樹に置き換えてみましょう》</p> <p>グループで話し合い</p> <p>代表者が発表（2グループ）</p>
---	--

生徒 M：武士という高い身分を捨ててまで母の所に戻る意味が、調べ学習の時には理解できなかったけど、これまでの話を聞いて早く夫を亡くした母に親孝行したかったということが分かりました。

生徒 N：武士という位は一生何とか生活していけるくらいのものだと思いますが、それを捨ててもいいくらい母のことを大事に考えていたのだと思いました。

生徒 O：中江藤樹は常に感謝の気持ちを持って生きている人だったのだと思います。特に母への感謝が大きかったのだと思います。だから脱藩してまで親孝行したのだと思います。

生徒 P：藤樹は母のために誰もが想像もしない脱藩という選択をしました。その時僕ならお金ももらえるし、生活には困らない仕事なのでもったいないと思いました。ですが、脱藩してまで母を助けようとした勇気がすごいと思いました。

考察

「脱藩」の持つ意味をどれだけ深く捉えられるか、今の日本の時代背景からはつかみにくいところだろう。しかし、この問いから「孝行」「親孝行」という言葉が出るかどうかがこの時間全体の要である。近い言葉として「母のことを大事に考えていた」「母を助けようとした」という表現もあった。授業終了後の感想文には多くの生徒がいずれかの表現をしていたが、それでよしとはし難い。

先の水野哲弥氏は、授業作りの要点の一つとして『道徳的価値を理解させるためには、目に見える行為とそれを生む心とを明確にすることが大切である』^{(注)9}と述べている。つまり、ここで藤樹に脱藩という行為をを生み出した心は何か、ということである。それは「孝」以外の何物でもない。生徒 P が答えた中に人間の選択基準の一つがあった。『お金ももらえるし、生活には困らない仕事なのでもったいない』がそれである。言い換えれば「損か得か」「辛いか楽か」といったものである。しかし藤樹の基準はそういうところにはなかった。他のいかなる生物も持たず、ただ人間だけが持つ「孝」が基準だったのである。

「脱藩」という行為を「勇気」と捉えた生徒がいた。確かに勇気は含まれる。それも母のための勇気であるから尊い。そういう意味では脱藩という行為をを生み出した心ではないとは言えない。しかし、上に述べたように中心にあるのは「孝」であることは動かない。

一生の生活が保障されている武士の地位を捨てることは、いかに親への孝行を尽くす心があったとはいえ、よほど決意がなければできない、という点への気づけましたか。

【板書】
 人間は ⇒ ・安易な道を選びやすい（武士の身分は一生の生活を保障）
 ・権威への盲従（上の人にノーということは難しい）
 （自分が一番大事、一番かわいい）
 ➡ あえて自分が不利になることを選ばない
 ・自己の信念を曲げてでも出世を求める
 （人間は誰でも高い地位につきたいと考える）
 などに流れやすいことへの気づき。

<p>【発問4】 黒板に今の答えから見られる人間の傾向を三つにまとめました。三つの共通点はどのような気持ちだと思いますか。</p>	<p>生徒を指名</p>
--	---------------------

生徒 Q：「自分さえよければいい」ということかな

そうですね。前の時間、藤樹が25歳のころに母を大洲へ迎えようとした話がありました。その時の母の気持ちを考えた時、「藤樹の学問や仕事の邪魔にならないために断った」という答えが何人かの人から出ました。ここにまとめた人はその逆です。自分の得になること、楽な生活ができることが先にあるのです。
 しかし、藤樹の生涯を振り返ると、自分より親、さらには他人である村人たちへの思いやりが先なのです。自分のことはそのあとなのです。
 このことを藤樹は学問から学び、学んで教えるだけではなく実践しようとしたのです。これが言行一致（知行合一）ですね。

「偉人の生き方に学ぶ（Ⅱ）」の伝記の5ページを開いてみましょう。そこに、『翁問答』と、藤樹が友人に宛てた「手紙」の一部が書かれています。
 彼は『翁問答』の中で、
 『胎内にある間も母徳の教化あり』（5ページ・1行目）という名言を残しています。
 「胎内」というのは、お母さんのお腹の中ということですね。お腹の中にいる時から、すでにお母さんの「徳」、人間としての良いものを教えられている、ということです。
 また中江藤樹は、ある人に与えた手紙の中でこんなことを言っています。
 『母の胎内に宿って以来、二つ三つになるまでの母の苦勞、その恩愛の恩などよくよくものと思つて、二、三歳の子供のころから今日までに習い染みこんだ様々な心をすべて除き去り、ただ一つの思い、もしそのときに親たちがいなかったならばどうなっていたらうかに思いが至ったならばどうであろうか』（5ページ・5行目）
 これをもとに考えてみましょう。

<p>【発問6】 藤樹の母への感謝は、どこから始まっているのでしょうか。</p>	<p>「翁問答」の手紙を参考にして、「自分の問題として、自分を藤樹に置き換えてみましょう」</p>
<p>生徒指名 生徒の答えを板書</p>	<p>グループで話し合い 代表者が発表（2グループ）</p>

生徒 R：藤樹が「翁問答」に『お腹の中にいる時から、すでにお母さんの「徳」、人間としての良いものを教えられている』とあります。

私は生まれたあとお母さんがいろんな世話をしてくれたところからとっていました。だから藤樹の考え方に驚きました。

考察

生徒Qが答えたように、【発問4】は「翁問答」の手紙の中に答えがある。ただ、生徒が述べているように、普通は生まれたあとからさまざまところで、母の愛情をかけられていると考える。しかし藤樹の、母のお腹の中にいる時から、母の人間としての良いものをすでにもらっているのだという考え方は、生徒たちが初めて触れる考え方である。自分が生まれる前から、お母さんは人に親切にしたり、人の世話をしたりして、自分が得た徳を血や栄養と一緒に与えてくれていたのだという気づき。【発問4】の命はそこにある。

【発問7】 親に「孝行」するというのが、具体的に「自分はどうする」か、「何ができるか」を明らかにしてみよう。

生徒を指名

生徒S：誕生日や父の日・母の日などにプレゼントする

具体的なものが出てきた。が、生徒が最も思いつきそうなものである。そこで視点を少し変えた。

「孝」の字の成り立ち（字源）を調べてみました。「孝」の文字は「子供が老人（年老的な親）を背負う」形を表しています。そこから「子供がお父さんお母さんに尽くす」ことの意味になりました。そのことをちょっと頭の隅に残しておいて、

孝子

子供が老人（年老的な親）を背負う」形

老子

親が子供を抱きかかえる形

総合学習の時間用の冊子、4ページです。

『論語』にこんな文があります。

孔子の弟子の子游という人が、「孝」について尋ねました。孔子は、今の世の中では、親に衣食住などに不自由のないように奉仕することをいう。しかし、「犬馬に至るまで皆能く養うあり。」これは犬を飼っても、馬を飼っても、かわいいと思えばいくらでもうまいものを食べさせるし、安心して寝起きさせるということです。

つまり、衣食住を養うだけなら、犬や馬を飼うのと変わらないじゃないか、というのですね。確かにそうですね。

【発問8】 では、何が大事か。

実際、親の面倒をみている犬を見たことがありますか。そんな馬を見たことがありますか。

生徒を指名

生徒T：ありません。

動物は子供の面倒はみます。しかし、親の世話をするのは人間だけなんです。

<p>【発問 9】例えば、アフリカでシマウマが走れなくなるとなると思いませんか。</p>	<p>生徒を指名</p>
---	--------------

生徒 U：ほかの動物に食べられます。たとえばライオンとか・・・。

<p>【発問 10】そうですね。ではそのライオンが、年を取って牙がなくなるとどうなると思いませんか。</p>	<p>生徒を指名</p>
---	--------------

生徒 V：えさを獲れないので死んでしまうと思います。

そうですね。多分ほかの動物、例えばハイエナなんかには食べられるかもしれませんね。

<p>【発問 11】動物はけがであろうと、年をとってであろうと、とにかく走れなくなったり、牙がなくなったりすると、生きていけないのです。しかし、人間は年をとっても生きていけます。なぜでしょう。</p>	<p>生徒を指名</p>
---	--------------

生徒 W：「孝」があるから、子供とか周りの人が面倒をみるから。

そうですね。それは「孝」があるからなのです。

そして親に対して「孝」の心を持つのは、単に育ててもらった感謝というより、「敬せずんば何を以て別たんや。」

感謝以前に「敬」、すなわち「尊敬・敬う」気持ちがあるからなのです。親を尊敬している犬や馬を見たことがありますか。みんなの家で飼っている犬や猫がいるとしたら、親孝行な犬や猫を見たことがありますか。

ここが獣と人間との大きな違いです。親に対して「敬う」ことがなければ、犬や馬と同じだと、孔子は答えたのです。

<p>【発問 12】さて、藤樹の9歳の行動を思い出してください。アカギレで苦しんでいる母に菓を持っていきましたね。これは、さっき親にどんなことができるかと尋ねた時の、「誕生日や父の日・母の日などにプレゼントする」と同じ行動と言えます。形のあるものでした。</p> <p>しかし、25歳の時は母と一緒に暮らそうという気持ちです。27歳の藤樹は全てを擲って何一つ持たずに帰ってきました。形はありません。</p> <p>形はない、目には見えないけれどあるのですね。それは何だったのでしょうか。</p>	<p>生徒を指名</p>
--	--------------

生徒 X：「孝」「親孝行」

藤樹は母にどんな心を持っていたとすることができますか。

生徒 X：思いやりとか尊敬だと思います。

藤樹の母への恩は論語にもあったように、この「尊敬」が根本にあるのです。かわいそうだとか思いやりだけではないのです。だから脱藩という、自分の命をかけた行動ができたのですね。

この話と合わせて、「親に心配をかけないこと」が一番の親孝行であることも、一つの考え方として、今後の自分の在り方を考えるきっかけにしてください。

《まとめ》

お腹の中にいる時から、すでにお母さんの「徳」、人間としての良いものを教えられている、ということです。この世に生れ出る以前から、母の深い恩を受けているのだ、と。

藤樹はさらに、二・三歳になるまでの母の苦勞、恩愛の恩などは、よくよくのもので、親がいなかったらどうなっていたらと、その深い愛情と恩に感謝しているのです。そして、藤樹は気持ちの上での感謝にとどまらず、その恩に報いる実践を生涯を通して行っているのです。言行一致（知行合一）ですね。

【評価の観点】

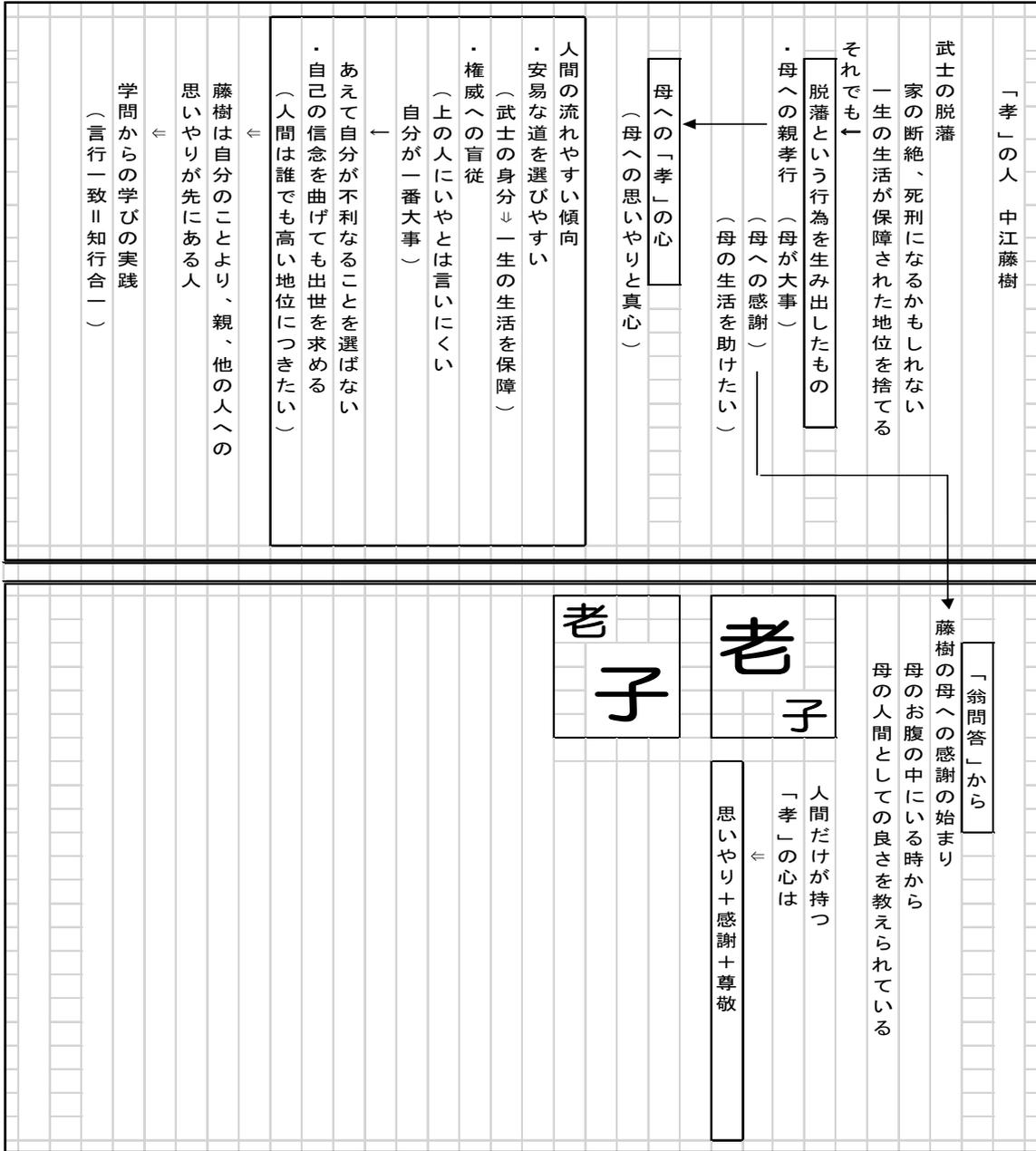
生徒たちが調べたことや考えてきたこと、資料を反芻し、最後に何を感じたか。

資料の文や言葉にとらわれず、自己の問題として受け止めることができたか。

藤樹は、「孝」を人にとってどのようなものと考えているのだろうか。その答えに行きついたところで、自己の問題として受け止め、自分はどこまで考えているか、行動としてできているかをふりかえる。

それでは、これで私の「道徳の授業」を終わります。

【板書】



7. アンケートの分析・まとめと今後の課題

(ア) アンケートの分析から

アンケートの質問項目を追跡するとおおよそのつながりが見える点があった。

項目1と2がよく似た数字になっていることは理解できる。4の数字もそれと関連していることが分かる。しかし、それと比較すると3「道徳の時間の授業の流れが適切で、考える意欲がもてましたか」に対して評価1「よくわかる」が半減し、2「まあまあわかる」が1.5倍になっている。明らかに授業の進め方の中で過不足があったことを示している。振り返ってみると第1時での「近江聖人」については藤樹の人間を知ってもらいたかったのだが、もう少し簡素化できたと思う。母とのエピソードに絞り込む方がテーマに集中できた。生徒の感想文で最も感動していたのは、確かに脱藩して武士を捨ててまで母に尽くす場面だった。プラス面としてとらえるとすれば、項目4の数字が示すとおり中江藤樹がどういう人であったかを知れたことである。

項目4と7「中江藤樹の生き方や姿勢に関心がもてましたか」を比較すると、藤樹の生き方に対しての教師の感じ方と生徒の感じ方に温度差があったと考えられる。教材が「生徒の生活実態に即して興味・関心をひくものでなければなら」かった点で、「まあまあ」と答えた生徒が6割程度、「とても」は25%、合わせれば82%であるが、必ずしも適切な指

1 = よくできた 2 = まあまあできた 3 = あまりできなかった 4 = 全くできなかった		男子 (20名)				女子 (8名)			
		1	2	3	4	1	2	3	4
1	総合の時間で中江藤樹について、生い立ちや どういう人だったか理解できたか。	9	8	3		5	3		
2	総合の時間で調べる内容の尋ね方は、わかり やすかったですか。	9	9	2		3	3	2	
3	道徳の時間の授業の流れが適切で、考える意 欲がもてましたか。	4	13	3		1	6	1	
4	道徳の時間で、中江藤樹についてどういう人 か、理解できましたか。	7	11	2		5	3		
5	道徳の時間で、中江藤樹の授業に興味や関心 がもてましたか。	7	9	4			6	2	
6	中江藤樹の授業で、先生の問いかけに真剣に 考えることができましたか。	7	11	2		1	6	1	
7	中江藤樹の生き方や姿勢に関心がもてました か。	5	12	3		2	4	2	
8	この授業を受けて、自分の「孝」の考えを深 めるのに役立ちましたか。	12	6	1	1	4	3	1	
9	この授業を受けて、自分の考え方や行動を変 えようと思いましたか。	10	6	3	1	3	4	1	
10	また、偉人の生き方から学んでみたいと思 いますか。	11	6	2	1	2	1	4	1
		81	91	25	3	26	39	14	1
		41%	45%	12%	2%	33%	49%	17%	1%

導になってはいなかったと反省すべきである。項目 8, 9 について評価を 1 とした生徒が多かった点では、中江藤樹を通して人として大切にすべき「徳」について伝わったものがあったと判断したい。これは感想文の内容も含めての上での判断である。

男女総合の合計と%

評価 1	評価 2	評価 3	評価 4
107	128	39	4
38%	46%	14%	2%
84%		16%	

アンケート結果から総合して言えることは、前回の西郷隆盛と比較して項目 8, 9 の評価 1・2 が大幅に伸びた点である。前回は両項目とも評価 1 は 30% 台であった。その点が伸びた理由として総合学習の時間と連結することで、前もって人物の輪郭や背景をつかんでいたことが考えられる。

(イ) まとめと今後の課題

道徳的観点から中江藤樹を通して学ぶことは多い。どの視点から捉えるかによって藤樹という人間的魅力も変わる。今回の実践では「孝」に焦点を当てて試みた。「偉人」と呼ばれるには何らかの挫折や辛苦に耐える、そこから立ち上がる部分がある。違うのはどのような挫折や辛苦か、そこで何を考え何を支えに生き抜いたかという点であろう。

藤樹にもそれはあった。ただ、今回の試みは倒れたところから立ち上がる偉人としてではなく、人間の人間たる最も根本になるものを生涯実践し続けた人として見つめてほしかったのである。学習者はちょうど中学 2 年生。伝記を読むのに適当な時期として、立志の時期である「十二、三歳から十七、八歳」の中に入ったところである。井口潔氏の提唱する『生物学的視点からの教育の見直し』の中で、「ヒト」が「人間」となる成長過程の第 3 期、「青年期 (11 歳～20 歳)」でもある。

一般にいう思春期 (第二反抗期) に入るところは、強制・干渉・叱責等への反抗、意見の相違などへの批判的態度が多くなる。特に身近な家族に対して顕著に現れる。このような精神的成長段階で強制だけでは道徳的な学びはない。むしろ、内面に響く具体的な話材が必要なのである。また、干渉することのない、批判のしようのない実践から感じ取る感性を磨く学びが必要である。

中江藤樹の母とのエピソードは、家庭の中での自分を振り返り、親とのつながりを見つめ直すために意義があると考えた。たびたび触れた生徒の感想を一部掲載する。

「私は親に何度も反抗していました。藤樹の気持ちと母の気持ちを自分と親に置き換え考えることができた」「母は私を生むまでも辛いことがあったと思うけど、今まで自分を支えてくれた」「私も母親になる時が来たら、母の思いを忘れないことが大事だと思いました」「私も父がいないので、藤樹のように優しく強い大黒柱になりたいと思いました」

それぞれの置かれた立場で感じるものがあったことが窺える。単に藤樹は立派だ、母はずばらしいに止まることなく、自分にどれだけ引き寄せて考え、感じるができるか。

その道筋をつけ導くことの難しさは今回も身に染みた。

「偉人」の伝記をもとにした自作資料を作る上で注意すべき点の三つ。「事実関係が正確で具体的であるか」「テーマに関わることにこだわり過ぎて内容が偏ることなく、客観的であることである」「選んだ人物が教師の興味と生徒の興味・関心にズレが生じる」この三点の重要性を再確認できた。バランスのよい教材にするために、さらに無駄を省き、焦点を絞り込むための研究が必要である。いろいろな人物で行なうことも一つの方法であるが、同じ人物を扱い、前準備を含め授業の展開をより良くすることで授業力をつけられると感じた。来年度、もう一度総合学習の時間と連結する形をとった上で、不必要な部分をそぎ落とし、さらに洗練された指導案作り、教材作りに挑戦する予定である。

（注）

- 1：「道徳教育の充実に関する懇談会」（第8回）の主な意見（1. 教材・教科書の取り扱いについて）
- 2：宇都宮大学教育学部教授（2012年現在）教育学博士
- 3：教育哲学者。「人生二度なし」の真理を根本信条とし、「全一学」という学問を提唱した。
- 4：九州大学名誉教授、日本外科学会名誉会長。『ヒトとして生まれてきた赤ん坊を人間にすること』が子育て・教育の基本であると提唱。ヒトの教育の会会長。
- 5：フランスの小説家・批評家・詩人
- 6：植草学園大学発達教育学部名誉教授・日本教育技術学会理事・名誉会長等
- 7：日本道徳基礎教育学会 第251号 2015年10月 P24
- 8：横須賀市立武山小学校教諭
- 9：日本道徳基礎教育学会 第251号 2015年10月 P25

《参考文献》

- 文部科学省中学校学習指導要領解説「道徳編」（文部科学省）（2012年四版）
- 文部科学省道徳用読み物資料（中学校）（文部科学省）（2012年）
- 経書大講『論語』1（為政第二） 小林一郎著（平凡社）（昭和13年再版）
- これだけは知っておきたい道徳授業の基礎・基本 渡邊弘著（川島書店）（2012年第1刷）
- 社会系諸化学の探求：藤井徳行教授退職記念号・社会科学研究特別号「人権教育に向けた社会科学習指導の試み」藤樹精神と学校教育 小久保義直著（法律文化社）（2010年）
- 道徳教育研究「Ⅱ授業研究と研究協議」「人間のよさに向かう心と行動を考える道徳の授業」水野哲弥著（日本道徳基礎教育学会 第251号）（2015年10月）
- 道徳教育論集第12号「道徳の時間にしなければならないこと、しなくてもよいこと」服部敬一著（日本道徳基礎教育学会 第243号）（2013年5月）
- 道徳教育の研究 教師養成研究会（学芸図書株式会社）（2008年新訂修正7刷）
- 修身教授録 森信三著（致知出版社）（1998年第16刷）
- ヒトの教育 井口潔編著（小学館）（2006年第1版）
- 人類が向かうべき進化の方向は「無の境地」だった！（ヒトの教育の会）（2014年初版）
- 生物学的視点からの教育の見直し 井口潔著（ヒトの教育の会）（2013年第4版）
- 内村鑑三の『代表的日本人』を読む 岬龍一郎著（致知出版社）（2001年第1刷）
- 道徳力 丸山敏秋緒（風雲舎）（1999年第2刷）

- 偉人を育てた母の言葉 大坪信之著（致知出版社）（2003年第1刷）
なぜ道徳は必要なのか 岩田啓成緒（モラロジー研究所）（2006年第2刷）
中学生の道徳 かけがいのないきみだから2年（学研）（2015年平成27年度版）
中学道徳 あすをひらく1・2・3（東京書籍）（2014年）